

作田啓一著

個人主義の運命

— 近代小説と社会学 —



岩波新書



作田啓一著

個人主義の運命

—近代小説と社会学—

作田啓一

1922年山口県に生まれる
1948年京都大学文学部卒業
専攻—社会学
現在—京都大学教授
著書—「恥の文化再考」
「価値の社会学」
「深層社会の点描」
「ジャン-ジャック・ルソー
—市民と個人」

個人主義の運命

岩波新書(黄版) 171

1981年10月20日 第1刷発行 ©

定価 380 円

著 者 さく 作 田 啓 一

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目次

序章	文学と社会学のあいだ	一
----	------------	---

第一章	ジラールの文芸批評	一三
-----	-----------	----

1	三角形の欲望——媒介の理論	一四
---	---------------	----

2	優越への願望——超人ニーチェ	二五
---	----------------	----

3	三人世帯の夢想——初期のドストエフスキー	三六
---	----------------------	----

4	地下室の心理——『地下生活者の手記』を中心に	四八
---	------------------------	----

5	憑かれた人々——『悪霊』を中心に	五六
---	------------------	----

6	悪魔の誘惑——『カラマーゾフの兄弟』を中心に	六五
---	------------------------	----

第二章	個人主義思想の流れ	七五
-----	-----------	----

1	中世社会の共同態的性格	七六
---	-------------	----

2	共同態の崩壊	八四
3	個人主義の概念	九四
4	十八—十九世紀の個人主義	一〇〇
5	二十世紀の個人主義	一〇八
6	聖なる欲望	一二七
7	ドストエフスキーの個人主義批判	一二五

第三章 日本の小説にあらわれた三者関係……………一三一

1	師弟のきずな——夏目漱石『こゝろ』(一九一四年)……………一三四
2	愛と恐れ——三島由紀夫『仮面の告白』(一九四九年)……………一四七
3	コケットリーの構造——武田泰淳『「愛」のかたち』(一九四八年)……………一六一
4	とがめる者・許す者——太宰治『人間失格』(一九四八年)……………一六九

終章 個人主義のゆくえ……………一八七

あとがき……………	二〇一
-----------	-----

序章 文学と社会学のあいだ

三者関係

この本を読もうとしているあなた方の中には、小説の好きな人も多いのではないかと想像します。小説の中では、いわゆる大衆小説も含めて、というよりは大衆小説においては特に、一人の女性をめぐって二人の男性が互いにライヴァルとなり、彼女の愛を得ようとするとか、また逆に女性が二人で男性が一人の組み合わせであるとかいった、いわゆる三角関係がしばしば主題になっています。そしてこのようなライヴァル同士のうち敗北したほうは、大変つらい思いをする。この種の敗北感は人間の苦悩の中で最も耐えがたいものの一つであるように描かれています。またある場合には、優位に立っている側が、たとえば友情のために自発的に競争から身を引く、といったような、ストーリーが展開されます。この種の寛容な態度やそれに伴う感傷的な気分が、作品のハイライトになることもありました。三角関係は小説だけではなく演劇や映画やテレビドラマにもしばしば主題として登場します。

いわゆる三角関係ほどではありませんが、三人が同じ性に属している友情の場合でも、一人の客体をめぐるライヴァル同士の勝利と敗北が主題とされることがあります。また一人の先生をめぐって二人の弟子が後継者の地位を争い合う、あるいはそこまでゆかなくても、自分がライヴァルよりも先生に可愛いがられていないのではないかと思つて悩む、こういうケースもあ

ります。このような三者関係が生み出す葛藤は、私たちが性にめざめる以前から、すなわち小学生の頃から、あるいはもっと以前から私たちが経験しているものです。小説や演劇や映画の中だけではなく、実際の人生においても、いわゆる三角関係を含む三者関係は、社会的存在としての人間が経験する悩みの最も普遍的な源泉の一つであると言ってよいでしょう。そして、この種の悩みは、どんな社会体制のもとでも、人間が免れることのできない悩みであることを、私たちは直観的に知っています。

貧困や失業の問題がなくなっても、機会の均等や参加の平等が十分に実現されても、三者関係に源泉をもつ苦悩は、病いや死と同じように私たちから離れることはありません。確かに、社会の違いによって、病いや死の苦悩に人々が与える意味が異なってくるように、三者関係に伴う苦悩の意味も異なってくるでしょう。しかしこの苦悩から逃れることは、病いや死から逃れることと同様、人間の条件が変わらない以上、どんなユートピアにおいても不可能であると思われると思います。

人間の苦悩の問題

それでは、三者関係に伴う苦悩から、人間はどうして抜け出すことができるのでしょうか。あるいは、苦悩をなくすることはできないとしても、それに別の意味を与えることで苦悩の性質を変えることができるのでしょうか。小説というものは、こ

うした問に対して直接に答えることを任務とはしておりません。しかしすぐれた小説は、この問になんらかの仕方では答えております。第一章で取り扱うドストエフスキーの小説は、その面で——ほかにいろいろの面があるけれども——読者の要求に応じているので、大変魅力的です。ところで、社会学の場合はどうでしょうか。こうした問に答えてきたでしょうか。その問にはほとんど答えてこなかったし、いまもそうである、というほかはなさそうです。

確かに、エミール・デュルケーム、マックス・ヴェーバー、マックス・シェーラーのような十九世紀後半から二十世紀前半にかけて活動した社会学者たちは、人間の苦悩の問題を社会学の主題の一つとしました。そしてその苦悩に対して常識とは異なった意味を与える試みを行ないました。このタイプの社会学の系譜は、今日ではたとえばピーター・バーガーのような社会学者につながっています。狭義の社会学に属してはいませんが、カール・マルクスの仕事も、もちろん人間の苦悩の問題を主題の一つとしていました。しかし、これらの人々は三者関係の問題を取り上げて論じたことはありません。というのは、シェーラーは別として、彼らは主として総体的な社会構造を問題としていたので、三者関係に限らず、パーソナルな人間関係一般に関して、ほとんど学問的関心を向けなかったからです。

ところが最近になって、パーソナルな人間関係に関心をもち社会学が登場してきました。そ

れは象徴的相互作用派やそれに類似する立場に立つ社会学です。それは人間と人間との相互作用において言語や身振りなどのシンボルのもつ重要な機能に注目します。パーソナルな相互作用を取り扱うので、その立場は心理学に接近します。しかしこの学派においても三者関係を社会学の重要な枠組として設定する用意はありません。この学派の中には、例外者として烙印を押された人間の苦悩に注目する人々もいます。その状況においては、烙印を押した者、烙印を押された者、押された烙印を通してその人を取り扱う者の三者が登場します。しかしこの状況において登場する者が二人ではなく三人であることが、研究者によって問題として十分に自覚されていなかったため、ここであらわれてくる三者関係の図式は、他の人間関係に広く適用されるにいたっておりません。

社会学の 基本図式

以上で述べた通り、社会学においては文学（劇映画などをも含む）の場合ほど三者関係が重要視されていません。というよりも、ほとんど無視されています。それは社会学がパーソナルな人間関係よりも、それを越えたレベルにある社会構造を主として対象としてきたためかもしれません。しかし最近のようにパーソナルな人間関係を扱う社会学が登場してきた段階でも、三者関係に伴う苦悩がめつたに主題とならないところから見ると、その原因は、このような主題は文学にまかせる、といったような社会学者の分業意識にも

見いだせるかもしれませんが。こうした分業意識が作用していることも確かですが、さらに立ち入って考えてゆくと、三者関係という主題の欠落には、もっと深い原因があるように思われます。

その原因は、三者関係という主題を生み出す背景となっている基本的前提が欠けていることにあるようです。その前提とは、三者関係こそ社会の最も要素的な形態である、という前提です。社会学者の多くは、二者関係こそが社会の基本的形態であると考えてきました。したがって二項図式を前提として社会現象をとらえる構えが、最初からとられてきました。ここに、主題としての三者関係の欠落の決定的な原因があるように思われます。

それでは、社会学者の多くが、なぜ三項図式ではなく二項図式を基本的前提としてきたのか。この問に対しては、第一章と第二章において答えることになるでしょう。結論を先取りし言えば、西欧近代社会を生み出した思想的要因であり、かつその支柱でもある個人主義の上に立って、社会学という学問が成立したためである、というのがその答えです。

文学の主題

一方、文学の側では、三者関係がしばしば主題として選ばれてきました。しかしこの場合でも、第三者が他の二者と同等の重要性を与えられてきたかどうかということになる、私たちは容易に答えを出しかねる気持ちに陥ります。たとえば、あるタイプの

小説においては、二者のきずなの強さを描く手段として第三者が登場するにすぎない。あるいは別のタイプの小説においては、主人公のパセティックな孤独を描く手段として他の二者が登場するにすぎない。要するに、ロマンチックな愛や孤独を描くことが主題であつて、その限りにおいてこれらの作品は個人主義の上に立つており、三者関係は単なる舞台装置にとどまっています。それらは必ずしも三者関係の図式にもとづいていない。もちろん、私はこれらの作品がつまらないと主張しているわけではありません。作品の質を左右する要因は、三項図式にもとづくかどうかということだけではなく、ほかにいろいろあるからです。しかし近代の小説は、市民社会の産物である以上、社会学の場合と同様に二項図式の上に立つて書かれることが多い。

こういうわけで、文学においては主題として三者関係が選ばれやすかつたとしても、それらの底に横たわっている基本的図式が二項図式であるという意味で、本質的には社会学の場合とたいして異なっていない。ただ、文学においては主題として三者関係がしばしば選ばれているので、この主題を通して、三者関係こそ社会の原型であるというアイディアに読者が到達しやすいという違いがあります。そしてまた、三者関係にはさまざまな複雑な感情が伴っているもので、これらを読む読者にとっては、社会的存在としての人間の心の深い層が感得しやすい。こ

これらの二点は、社会学が文学から学ぶ必要のある長所であります。

ジラールと K・バーク

私はこの本の終章で、社会学にとって基本的な三項図式の提案を行なうことにします。そしてこの提案のポイントは、行為の主体と行為の客体とを媒介する第三者のパラダイムの作成にあります。主体と客体とを結ぶ媒介項は、両者に制約される範囲内で多様な形をとりうるはずですが、この多様な変化型を網羅するリストをつくるのが、ここで言うパラダイムの作成です。

そのパラダイムを考えるにあたって、私はルネ・ジラールという人の文学批評から多くを学びました。ジラールの文学批評の本は三冊で、『ロマンチックな虚偽とロマネスクな真実』（一九六一年、邦訳『欲望の現象学』法政大学出版局）、『地下室の批評家』（一九七六年、邦訳予定）、『レンツ・一七五一—一七九二』（一九六八年）です。そのほかに文化人類学、心理学、宗教学に近い領域での独自の研究もあります。私がここで特に参考にしたのは、『ロマンチックな虚偽とロマネスクな真実』『地下室の批評家』の二冊です。

これらの文学批評の仕事を通じて社会学の理論の展開を試みようとするのが私のねらいなのですから、文学作品をそのままの形でデータとして用いるわけではありません。私の意図と似た意図をもって社会学の理論を展開した前例として、D・H・ダンカンの仕事を挙げることに

できます。彼はケネス・パークの文芸批評に導かれて社会学の体系を考えました。パークは作家ではなく批評家であつて、彼の批評の枠組からダンカンが多くを学んだわけです。こういう点で、私がめざしているのは、ダンカンの仕事に似ていますが、類似点はその点に限られています。パークの批評の枠組は大変複雑ですが、ジラールのそれは極めて単純です。そのうえ、ダンカンにはパークに導かれて体系理論を構想しましたが、私の場合はジラールに依拠しつつ媒介者の概念および三項図式を構成するだけにとどまります。こういうわけで、私のねらいはダンカンの意図よりもずっと制限されたものなのですが、方法の点では類似しています。すなわち、それは、すぐれた文芸批評の媒介を通じて、文芸作品のデータを社会学の理論の展開に用いるという方法です。

文芸の社会学

こうした探求の領域は、広い意味での「文芸の社会学」の一分野であると言えるでしょう。文芸の社会学とは、文芸作品の内容や形式が、社会の基底的な諸側面によって規定されていることを明らかにしようとする領域である、とふつう考えられています。社会の基底的な諸側面とは、たとえば生産様式、階級構造、マス・メディアの様式などです。もう少し上層の社会構造である読者層やジャーナリズムを含めることもできます。要するに、この研究領域は、文芸作品の意味を社会学的基底に還元することによって理解する還

元主義の方法と不可分に結びつくものとみなされています。

しかし文芸の社会学にもう一つの領域を認めてもよいように思われます。それは文芸作品から社会学的な命題の発見や統合を導き出し、この命題群から成る理論をもって、逆に文芸作品に新しい解釈を与える、という領域です。この領域は文学を社会学によって説明するのではなく、文学によって社会学を豊かにすることをめざしており、また文芸作品の検討に関しては、還元主義的な説明をめざすのではなく、解釈学的な理解をめざしている、と言えるでしょう。

文学の社会学的還元を通じて、G・ルカーチやL・ゴールドマンたちのすぐれた業績が生み出されたことは周知の事実です。しかしまた、文学と社会学の交流はもう一つの領域においても可能であると私は考えます。それは、先に述べたように、文学を通して社会学の命題を発見、統合し、その理論による作品の解釈をめざす領域です。この領域を文芸の社会学の一部と呼ぶのが適当であるかどうか、意見は分かれるでしょうが、この領域が魅力的であることは確かです。この領域はダンカンによって拓かれました。しかしダンカンの仕事そのものは、私にとって魅力的ではなかった。なぜなら、そこでは歴史的な視野が欠落しており、また苦悩からの救済の問題に全く関心が向けられていないからです。この視野と関心はルカーチやゴールドマンの仕事にはそなわっていました。それにしても、ダンカンによって一つの方向が示されました。

私の探求はダンカンのような体系づくりではなく、ごく限られた範囲での探求にすぎませんが、本書を通じてその概略をしるすことにします。

本書での 試み

なお一言付け加えると、この種の探求は『ジャン・ジャック・ルソー——市民と個人』(人文書院)において一度すでに試みました。ただこの場合には、私にとっての問いの行為理論の命題を導き出すことにありました。そしてこの命題を手掛りにして、逆にルソーの政治的著作の中にも含まれている彼の思想体系全体を理解しようと試みました。だからこの探求はルソーから始まりルソーで終わっています。

それに対して、これから試みようとしているのは、ドストエフスキーなどの諸作品をジラーが解釈した結果を学び、そこから社会関係の一理論を構想し、この理論をもって逆に一見この理論とは無縁の諸作品を解釈する、という探求なのです。この目的のために第三章で日本の文芸作品を取り上げるでしょう。第二章では、近代文学と二項図式を生み出した西欧の個人主義が、どのような社会的背景と結びついているか、また個人主義にはどんな形態があるかを素描するでしょう。そして個人主義の最近の形態が、以前の形態のもとでは隠されていた第三項の媒介者を明るみに出すにいたる経過を述べることにします。

